ドイツ語条件文体系の歴史的変化 - 条件文における接続法現在形の用法を中心に-

齋藤 治之

1. 序

条件文は一般に条件を表す前提部と結論部から成る。現代ドイツ語の条件文では、前提部と結論部に直説法が現れる条件文(Realis)および、前提部に接続法第2式の現在形、結論部に接続法第2式の現在形あるいは未来形が、あるいは、前提部に接続法第2式の過去形、結論部に接続法第2式の過去形あるいは未来完了形が用いられる条件文の2通りの形式が存在し、後者は特に非現実話法(Irrealis)と呼ばれる:

Wenn er das wüsste, (so) sagte er mir das.

Wenn er das wüsste, (so) würde er mir das sagen.

Wenn er das gewusst hätte, (so) hätte er mir das gesagt.

Wenn er das gewusst hätte, (so) würde er mir das gesagt haben.

古高ドイツ語ではさらに次の3つの場合に、条件文に接続法現在形(接続法 第1式)が用いられる:

- 1. 帰結文 (Apodosis) が命令法 (Imperativ)、勧誘法 (Adhortativ)、要求法 (Jussiv)を含む場合。
- (1)Sizze dâr-ûf. ube dih is luste.(B.68.20)

「もしあなたがそうしたいなら、その上に座りなさい。」

- 2. それ自身副文である帰結文に接続法が現れる場合。
- (2) Tannân ist nôt.ube uuanez <u>sî</u>. daz tero selbûn slahto ouh follez <u>sî</u> (B.196.31) 「そのことから、何か欠けたものが存在するならば、その同じ種類のものの中で満ちた(完全な)ものも必然的に存在する。」
- 3. 上記 1,2 以外の場合。
- (3) Ube dû sia uuola <u>bechennêst</u>. sô habo ih zît. tir dia uuârûn ze ougenne.(B.181.9) 「もしあなたがそのことをはっきりと認識したならば、次はあなたに真の幸福を示す時です。」

1の場合については、接続法現在形は可能の接続法に遡ると考えられる。また、2の場合については、副文を上位文とするいわゆる "Nebensatz 2.Grades (2等級の副文)"の動詞の法が、上位文の動詞の法が接続法の場合は、それに同化されることが古高ドイツ語では普通に見られる現象であり」、接続法は、それが上述の1の場合に由来するものを除いて、本来は直説法であったものの代わりに用いられている。このように、1,2の場合は接続法現在形の出現の理由が説明可能であるが、3の場合については用例数も限定されており、これまでその起源に関して定説が存在しない。本稿ではこの3の場合に限ってその用法と意味について考察してみたい。

既に述べたように、3の場合については、古高ドイツ語におけるその用例数が極めて少ないために、接続法現在形の意味と用法が説明されることは少数の例外を除いてこれまでほとんどなかった。

例えば、Behaghel は、3の場合のような接続法現在形による条件文はゲルマン語に本来的なものではなく、例えばゴート語(4)において、前提文中の接続

法現在形は、ギリシア語の未来形に対応する主文の接続法現在形に同化したものであると説明している 2 。

(4) jabai hopan skuld <u>sijai</u> þaim siukeins meinaizos <u>hopau</u>(II.Kor.11.30) εἰ καυχᾶσθαι δεῖ τὰ τῆς ἀσθενείας μου <u>καυχήσομαι</u>
「もし誇らねばならないのなら、私は自分の弱さを誇ろう」

それに対し、Wilmams は、接続法現在形による条件文がゲルマン語本来のものであることを正当に認め、ゴート語においては条件文中の接続法現在形は行為を、1. 単に想像されたもの、2. 可能なもの、3. 未来に起こるもの、として表すために用いられるとして、接続法現在形による条件文を Potentialis(可能法)と定義している³。しかし彼は、古高ドイツ語では、接続法現在形による条件文は資料によって確証することができず、確かに、Potentialis と解釈され得る条件文も幾つかは存在するが、そのような解釈はそれらのどの文においても必ずしも必要ではないと述べている。

Furrer は、Notker 訳の『哲学の慰め』 | こおいては、ラテン語の接続法現在形による。Potentialis 条件文と古高ドイツ語の接続法現在形による条件文の対応が全く存在しないことから、古高ドイツ語の接続法現在形による条件文はラテン語の Potentialis 条件文とは無関係であると述べ、古高ドイツ語の条件文における接続法現在形の特殊な意味を示唆する一方、その確実な用例が上述(3)の "Ube dû sia uuola bechennêst. sô habo ih zît. tir dia uuârûn ze ougenne. (B.181.9) "1 例のみであることから、上例の bechennêst の長母音 ê が筆記上のミスによるものでなく本当に正しいものであるかということにも疑問を投げかけている 4(Furrer1971:69-72)。このように、古高ドイツ語における 3 の場合の接続

法現在形による条件文は諸研究者によってその存在が疑問視されている。しかし、上述のNotker 以外の古高ドイツ語による文献にも、極めて少数ではあるが、3の場合にあてはまる条件文の用例が存在し、その条件文中の接続法現在形の意味と用法が、ゴート語の条件文中の接続法現在形のそれと対応することを考慮に入れると、古高ドイツ語における3の場合の条件文の存在は否定できないものであると考えられる。

そこで、本稿は、従来欠けていた広い視野からの体系的な古高ドイツ語条件 文の考察を補うために、次の古高ドイツ語の主要な文献に現れるすべての条件 文を、ラテン語からの翻訳である1、2、3、4の文献については、ラテン語原 文との対応も考慮に入れて、前提文に用いられる動詞の法と時制に従って分類 し、さらに、古高ドイツ語と他のゲルマン語における条件文の動詞の法・時制 の意味と用法を比較するために、ウルフィラ訳のゴート語聖書に現れるすべて の条件文を、同様に、ギリシア語原文との対応も考慮に入れて、前提文に用い られる動詞の法と時制に従って分類することによって、古高ドイツ語ひいては ゲルマン語の条件文における動詞の法・時制の意味と用法を、特に、接続法現 在形を中心として、包括的かつ体系的に探ることをその第一の目的としている。 この考察を通じて、接続法現在形による条件文を、印欧祖語に遡る条件文の体 系の中に位置づけることも可能であると考えられる。また、古高ドイツ語と現 代ドイツ語の条件文の体系を比較し、前者から後者への発展の経緯を考察した い。

- ターティアン (Tatian): ラテン語による四福音書総合の古高ドイツ語訳、9 世紀前半、東フランケン方言)
- 2. Notker 訳
 - ①哲学の慰め (Boethius, De consolatione Philosophiae)

- ②メルクリウスとフィロロギアの結婚 (Martianus Capella, De nuptiis Philologiae et Mercurii)
- (①、②とも 11 世紀初頭、アレマン方言)
- 3. ベネディクト修道会会則(Benediktinerregel 9 世紀初頭 、アレマン方言)
- 4. イシドール (Isidor セビリャ大司教 Isidor de Sevilla (560 頃 636) による教 義論争文書の古高ドイツ語訳、8 世紀末、南ラインフランケン方言を主とす る混合方言)
- 5. オトフリートの福音書 (Otfrids Evangelienbuch;9 世紀後半、南ラインフランケン方言)

2. 印欧祖語及びギリシア語・サンスクリット語・ラテン語の条件文の体系について

印欧祖語における条件文の体系は、ギリシア語及びサンスクリット語の条件 文に用いられる動詞の法・時制の比較により以下のように再建される。

- 1) Realis 話者が事柄の現実性について主観を交えず中立の立場をとる場合。 (前提文には直説法が、帰結文にも、普通、直説法が用いられる。)
- (6) áśvād iyāyéti yád <u>vádanty</u> ójaso jātám utá <u>manya</u> enam (Rv.10.73.10) 「もし彼らが、彼(インドラ)は馬から出たというならば、私は彼が力から生まれたと思う。」

- 2) Eventualis ①話者が事柄が未来に起こり得ると想定する場合。(前提文には接続法が、帰結文には、普通、直説法未来形が用いられる。)
 - ②ある一定の条件が充たされれば、繰り返し同一の結果が生 じること、あるいは、一般的真理を表す場合。(前提文には 接続法が、帰結文には、普通、直説法現在形が用いられる。)

①未来の事柄

(7) εἰ δέ κ ἄτερ δώρων πόλεμον φθεισήνορα δύης οὐκέθ ὁμῶς τιμῆς ἔσεαι πόλεμόν περ ἀλαλκών (Hom.I.604)

「もし汝が贈り物がなくなってから人々を殺毅する戦場に出かけるならば、た とえよく敵の攻撃を防いだとしても、決して同様に尊敬を受けることはないで あろう)

(8) yád adyá sūrya <u>brávó</u> 'nāgā udyán mitráya váruṇāya satyám vayáṃ devatrádite syāma táva priyáso aryaman gṛṇántaḥ (Rv.7.60.1)

「もし今日、スーリアよ!汝が昇りながら我々を罪のない者と、ミトラとヴァルナに真実を告げようとするならば、我々は、アディティよ!神々のもとで(罪のない者と)なるように。我々は、アリアマンよ!賛歌を歌う者として汝に好ましい者となるように!

② 反復的事実 · 一般的真理

(9) εἰ δ ἄρα τις καὶ μοῦνος ἰὼν <u>σύμβληται</u> ὁδίτης οὕ τι <u>κατακρύπτουσιν</u> ἐπεί σφισιν ἐγγύθεν εἰμέν (Hom. η .204)

「またもし誰かが一人で旅歩きをしている時(神々に)出会うと、我々は彼ら に近い関係にあるので、彼らは姿を隠すことなどしないものである| (10) ihéva śrnva esām káśā hástesu yád vádān(Rv.1.37.3)

「彼ら(マルト神群)の鞭の音が彼らの手の中で鳴り響くと、それはまるでこ こででもあるかのように聞こえる」

3)Potentialis — 話者が事柄を単に可能なものとして想定する場合。(前提文には 希求法が、帰結文にも、普通、希求法が用いられる。)

(11) εί μὲν γὰρ μὴ δῶρα φέροι τὰ δ ὅπισθ ἀνομάζοι Ἁτρείδης ἀλλ αἰὲν ἐπιζαφελῶς χαλεπαίνοι οὐκ ἂν ἐγώ γέ σε μῆνιν ἀπορρίψαντα κελοίμην Ἁργείοισιν ἀμυνέμεναι χατέουσί περ ἔμπης(Hom.I.515)

「もしアトレウスの息子が贈り物を差し出さず、今後も与えることを約束せず に、相変わらず激しく怒ったままでいる場合には、たとえ彼らがそれを必要と していても、私は汝に怒りを捨て去ってアルゴス人達を助けるように命じることはないであろう!

(12) yád aṅgá tvā bharatáḥ <u>saṃtáreyur</u> gavyán grắma iṣitá índrajūtaḥ árṣād áha prasaváḥ sárgataktaá vo vṛṇe sumatíṃ yajñíyānām(Rv.3.33.11)

「もし、実際、バラタの末裔達が、牛の群れの略奪を目指した軍勢が、せき立 てられ、インドラに鼓舞されて、皆で汝を越えて渡ってしまうことがある場合 には、汝の(矢のように)突き進む奔流は素早く流れ行くように!」

4)Irrealis — ①話者が実際には起こり得ない事柄を事実に反して想定する場合。 (前提文には希求法が、帰結文にも、普通、希求法が用いられる⁵)

②話者が実際には起こらなかった事柄を事実に反して想定する場合。(ギリシア語では、前提文と帰結文の両方に、普通(直説法アオリスト形が用いられる。サンスクリット語では、前提文と帰結文の両方に Konditionalis(条件法)が用いられる。)

①現在の非現実

- (13) εἰ τούτω γε λάβοιμεν ἀροίμεθά κε κλέος ἐσθλόν(Hom.E.273)
- 「もし我々がそれら2頭を捕まえれば、我々はすばらしい名声を獲得するのに。」
- (14) yád tśīyāmrtānām utá vā mártyānām jtved ín maghávā máma(Rv.10.33.8)

「もし私が不死なる者達あるいは死すべき者達を自分の意のままにすることが できるならば、私の後援者はまだ生きているのに。」

②過去の非現実

(15) Ένθα κεν Άργείοισιν ὑπέρμορα νόστος ἐτύχθη εἰ μὴ Άθηναίην ήρη πρὸς μῦθον ἔειπεν (Hom.B.155)

「この時、アルゴス人達にとって、天命を超えて、故郷への帰還が成就したであろうに、もしアテーネーに対してヘーレーが(次のように)言わなかったならば。」

(16) sá yád dhaitávad ev<u>ábhavisyad</u> yávatyo haivágre prajáh srstás távatyo hāivàbhavisyan ná prajanisyanta(ŚB4.3.1.25)

「もし彼がそれだけのものであれば、最初に創造されただけの数の生き物しか 存在しなかったであろう。それらは子孫をもうけなかったであろう。」

以上のように、4) Irrealis ②において、ギリシア語では直説法アオリスト形が、サンスクリット語では条件法が用いられ、両者の動詞の法が異なっているが、これを除けば、1)Realis、2) Eventualis、3) Potentialis、4) Irrealis ①における両者の動詞の法は一致しており、これらの法の用法が印欧祖語に遡ると考えることが可能である。また、4) Irrealis ②については、希求法完了形がその起源であるという説が有力であるが、その場合、ドイツ語の接続法2式はまさにこの形を引き継ぐものである。

このような条件文の体系を祖語から受け継いだラテン語においては、古典ラ テン語期以前に、次に見られるような変化が生じた。

1)Realis

(17) Si quid boni adportatis, habeo gratiam. (Plaut.Poen.640)

「もしあなたが何か良いことをもたらすならば、感謝します。」

3)Potentialis

(18) si neget adesse, exanimatum amittat domum. (Plaut.Cas.573)

「もしその者が無いと答えることがあれば、人は彼を魂を失った状態で家に送 り届けるであろう。」

4)Irrealis

- ①現在の非現実
- (19) Liber si sim, meo periclo vivam. nunc vivo tuo. (Plaut.Cas.293)

「もし私が自由であるならば、私は自分自身の判断によって生きるでしょうに。 今はあなたの判断によって生きています。|

②過去の非現実

(20) si quid eius esset, esset mecum postulatio.(Plaut.Cas.556)

「もし何かそのようなことがあったなら、(彼女は) 私に何かを言うことがあったろうに。|

このように、ラテン語では、印欧祖語の接続法が第3・第4活用の未来形 (例.2.sg. regēs,veniēs) になったために、2) Eventualis が1) Realis と融合して失われるに至った。また、3) Potentialis と4) Irrealis には、形態的には祖語の接続法と希求法には遡らないが、意味的には祖語の意志の接続法。と希求法を引き継ぐa-及びē-接続法が用いられている。

古代ラテン語期に続く古典ラテン語期には、接続法現在形による条件文は、 少数の例外を除き、専ら 3) Potentialis に限定され、4) Irrealis ①は接続法過去形 によって、4) Irrealis ②は接続法過去完了形によって表されるようになった⁷。

印欧祖語からラテン語に至るまでの条件文の体系を図示すれば、以下表 I のようになる。

(Lat.l, Lat.2 はそれぞれ古代ラテン語、古典ラテン語を表す。)

表 1

IE.	Real. (Ind.)	Event. (Konj.)	Potent. (Opt.)	Irreal. ① (Opt.)	Irreal. ② ⁸ (Opt.Perf.)
Gr.	Real. (Ind.)	Event. (Konj.)	Potent. Opt.)	Irreal. ① (Opt.)	Irreal. ② (Ind.Aor.)
Skt.	Real. (Ind.)	Event. (Konj.)	Potent. (Opt.)	Irreal. ① (Opt.)	Irreal. ② (Kond.)
Lat.1	Real. (Ind.)	Real. (Ind.)	Potent. ⁹ (Konj.Präs.) (Konj.Perf.) (Konj.Imperf.)	Irreal. ① (Konj.Präs.)	Irreal. ② (Konj.Imperf.)
Lat.2	Real. (Ind.)	Real. (Ind.)	Potent. (Konj.Präs.) (Konj.Perf.)	Irreal. ① (Konj.Imperf.)	Irreal. ② (Konj.Pluperf.)

- 3. ラテン語条件文の動詞の法・時制と古高ドイツ語条件文の動詞の法・時制の対応について ¹⁰
- I. ターティアン (Tatian) 表 2
- 1)Realis (ラテン語 (直説法) ………古高ドイツ語 (直説法)) (破線は言語間の対応を示す。以下同様)
- (21) Si ergo lumen quod in te est tenebre sunt, ipse tenebre quantae erunt?

「もしあなたの内にある光が闇であるならば、その闇の暗さはどれほどであろうか?」

Oba thaz lioht thaz thar in thir ist finstarnessi ist, thiu finstarnessiu vvuo mihhilu sint?(36.4)

3)Potentialis

ラテン語 Potentialis 6 例(Konj.Präs.6 例)中、3 例は古高ドイツ語 Ind.Präs.と、2 例は古高ド Konj.Präs.と、1 例は古高ド Konj.Prät.と対応する。ラテン語 Konj. Präs.と古高ド Konj.Präs.2 例の対応において、古高ドイツ語の接続法は、すべて除外文を導く接続詞 noba とともに用いられており、この接続法が可能の接続法ではなく、要求の接続法に由来することがわかる。

(22) et a foro nisi baptizentur non comedunt,

「また市場から帰ると、身を清めなければ、食事をしない」

inti fon strazu noba sih githuahan ni ezzant,(84.4)

他の4例中、ラテン語 Konj.Präs. と Irrealis を表す古高ドイツ語 Konj.Prät. との対応1例を除いて、他の3例はすべて以下のように、ラテン語 Konj.Präs. (Po-

tentialis) に古高ドイツ語 Ind.Präs. (Realis) が対応する。

(23) Si enim diligatis.eos qui vos diligunt, quam mercedem habebitis?

「というのは、もしあなたがたが自分を愛する者達を愛する場合には、あなたがたはどのような報酬を得るであろうか?」

Oba ir thie minnot thie iuuih minnont, uuelihha mieta habet ir thanne? (32.4)

一方、これに対して、ラテン語の直説法と古高ドイツ語の接続法現在形の対応例が35 例(ラテン語 Ind.Präs. 一古高ド. Konj.Präs.17 例; ラテン語 Ind. Futperf. 一古高ド. Konj.Präs.18 例)存在するが、その中24 例の帰結文に、以下の例文が示すように、命令文が現れ(場合1)、10 例が除外文を導くnobaとともに用いられている。...

(24) si filius dei es, dic ut lapides isti panes fiant.

「もしあなたが神の子であるならば、これらの石がパンになるように命じなさい。」

oba thu gotes sun sis, quid thaz these steina zi brote uuerden.(15.3)

残り1例は(28)のように、帰結文の欠けた不完全な条件文におけるラテン語 Ind.Futperf. と古高ドイツ語 Konj.Präs. の対応であるが、文脈から、帰結文に直説法による平叙文が想定され、この接続法現在形 tuoe が場合3に該当することがわかる。

(25) et siquidem fecerit fructum;

「もし(来年)実がなれば(結構です)。」

oba her thanne uuahsamon tuoe: (102.2)

4)Irrealis

- ① (ラテン語 (接続法未完了過去形) ………古高ドイツ語 (接続法過去形))
- (26) Si diligeretis me, gauderetis utique,

「もしあなたがたが私を愛しているならば、喜んでくれるであろうに。」

Ob ir mih minnotit, thanne gifahit ir,(165.7)

- ② (ラテン語 (接続法過去完了形) ………古高ドイツ語 (接続法過去形))
- (27) Si cognovisetis me, et patrem meum utique cognovisetis,

「もしあなたがたが私を知っていたならば、私の父も知ったであろう。」

Ob ir mih forstuontit, thanne forstuontit ir ouh minan fater,(162.3)

表2

	Ind.Prs.	Ind.Prt.	Konj.Prs.	Konj.Prt.	対応なし
Ind.Prs.	38	0	17	0	0
Ind.Perf.	1	12	0	0	0
Ind.Fut.	3	0	0	0	0
Ind.Futperf.	62	0	18	0	2
Konj.Prs.	3	0	2	1	0
Konj.Imperf.	0	0	0	11	0
Konj.Pluperf.	0	0	0	12	0
対応なし	0	0	0	0	0

(横列は古高ドイツ語、縦列はラテン語を表す)

II.Notker ①哲学の慰め(De consolatione Philosophiae) — 表 3

1)Realis (ラテン語 (直説法) ………古高ドイツ語 (直説法))

(28) Si quis fructus mortalium rerum ullum pondus beatitudinis <u>habet</u>, <u>poteritne</u> deleri memoria illius lucis .i. prosperitatis quantalibet mole ingruentium malorum?

「もし死すべき者達の成功というものが幸福のある重みを持つならば、輝かしい光り、つまり、栄光の記憶は人々を襲う不幸の圧力によって消し去られるであろうか?」

Ube menniskôn dîehsemo. ze deheinero sâligheite <u>zihet</u>, <u>mag</u> tanne dero skînbârûn êro keâgezôt uuerden. fone deheinemo geskehenemo leide? (83.10)

3)Potentialis

ラテン語 Potentialis 59 例 (Konj. Präs. 59 例) 中、39 例は古高ドイツ語 Ind. Präs. と、1 例は古高ド. Ind. Prät. と、8 例は古高ド. Konj. Präs. と、4 例は古高ド. Konj. Prät. と対応する(対応なし7 例)。ラテン語 Konj. Präs. と古高ドイツ語 Konj. Präs. の8 例の対応中、1 例の帰結文に命令文が現れ(場合 1)、7 例はそれ自身副文である帰結文に接続法が現れる(場合 2)。また、ラテン語の直説法と古高ドイツ語の接続法現在形の対応例が9 例(ラテン語. Ind. Präs. 一古高ド Konj. Präs. 9例)存在する。その中7 例の帰結文に命令文が現れ(場合 1)、1 例は副文である帰結文に接続法が現れる(場合 2)が、次の1 例はそのどちらにも当てはまらず、場合3 に該当すると考えられる。

(29) Qum si perspicaciter <u>intueris</u>. ordo est deinceps monstrare. quae sit uera. 「それをあなたがはっきりと認識したならば、次は真の幸福が何であるか示す番です。」

Ube dû sia uuola bechennêst, sô habo ih zît. tir dia uuârûn ze ougenne.(181.9)

4)Irrealis

- ① (ラテン語 (接続法未完了過去形) ………古高ドイツ語 (接続法過去形))
- (30) His igitur si pro se tecum fonuna <u>loqueretur</u>, quid profecto contra hisceres non haberes.

「それ故に、もしこれらの言葉によって女神 Fortuna が自らのためにあなたと語るならば、あなたはそれに対して反論する言葉を全く持たないでしょうに。」

Ube fortuna sih selbûn sus fersprechen <u>uuolti</u>. dara-gagene <u>nemahtî</u>st tu noh erliuten. (73.5)

- ② (ラテン語 (接続法過去完了形) ………古高ドイツ語 (接続法過去形))
- (31) si inquit ego scissem tu nescisses.

「もし私がそれを知っていたら、あなたはそれを知らなかったでしょうに、と彼は言った」

Ube ih sia uuissi chad er. sõ uuâre si dih ferholen.(35.26)

表3

	Ind.Präs.	Ind.Prät.	Ind.Perf.	Konj.Präs.	Konj.Prät.	Konj.Plu- perf.	対応なし
Ind.Präs.	51	1	0	9	0	0	1
IIIu.F1as.	15	0	1	2	0	0	1
Ind.Perf.	1	2	3	0	0	0	0
ma.Peri.	1	1	0	0	0	0	0
Ind.Fut.	1	0	0	0	0	0	0
ma.rut.	0	0	0	0	0	0	U
I. I Fatara	8	0	0	0	1	0	1
Ind.Futperf.	6	0	0	0	1	0	1
V : D	35	1	0	8	4	0	7
Konj.Präs.	19	0	0	0	2	0	/
IZ : I	1	0	0	0	24	0	0
Konj.Imperf.	0	0	0	0	10	0	0
Konj.Pluperf.	0	0	0	0	7	0	1
	0	0	0	0	2	0	1
対応なし	60	6	0	7	21	111	0

(横列は古高ドイツ語、縦列はラテン語を表す)

II.Notker ②メルクリウスとフィロロギアの結婚(De nuptiis Philologiae et Mercurii) —— 表 4 12

表 4

	Ind.Prs.	Ind.Prt.	Konj.Prs.	Konj.Prt.	対応なし
Ind.Prs.	1	0	0	0	0
Ind.Futperf.	0	1	0	0	0
Konj.Prs.	2	0	0	0	0
Konj.Imperf.	0	0	0	6	2
対応なし	7	0	2	4	0

(横列は古高ドイツ語、縦列はラテン語を表す)

- III. ベネディクト修道会会則 (Benediktinerregel) 表 5
- 1)Realis (ラテン語 (直説法) ………古高ドイツ語 (直説法))
- (32)Tunc inmaculatus ero coram eo, si observavero me ab iniquitate mea.
- 「もし私が自分の不正から自らを守るならば、その時私は神の前で汚れない者 となるであろう」

denne unbiuuamter pim fora imu,ibu pihaltu mih fona unrehte minemu.(VI 42)

3)Potentialis

ラテン語 Potentialis 25 例(Konj.Präs.25 例)中、7 例は古高ドイツ語 Ind.Präs. と、17 例は古高ド Konj.Präs. と対応する(対応なし 1 例)。ラテン語 Konj.Präs. と古高ド Konj.Präs. の 17 例の対応中、4 例の帰結文に命令文が現れ(場合 1)、残り 13 例はすべて場合 3 に当てはまる。場合 3 に該当するこれら 13 例(Ⅶ 40(2 例),Ⅷ 45 (3 例),Ⅷ 48 (2 例),Ⅷ 49 (3 例),Ⅷ 50 (2 例),XL Ⅲ 101)中、以下の 1 例を除き、他はすべてⅧ 40 と同一の構文に用いられている。

(33) Nam si foras oraturio <u>remaneant</u>, <u>erit</u> forte talis, qui se aut collocet et dormiat 「というのは、もし(遅刻した者達が)礼拝堂の外に留まっていることがあれば、横になって眠るような者がひょっとしているかもしれない」

Keuuisso ibu uzzana chirihhun piliben......kestatot......slaffit(XL Ⅲ 101)

(34) primus itaque humilitatis gradus est, si timorem dei sibi ante oculos semper ponens oblivionem omnino <u>fugiat</u> et semper <u>sit</u> memor omnia, quac praecepit deus,

「もし(人が)神への恐れを常に念頭に置きながら忘却を完全に捨て去り、神 が命じた事を常に覚えているならば、(それが)へりくだりの最初の段階である」

eristo inunu dera deoheiti stiagilsprozzo ist, ibu forahtun cotes imu fora augom simblum sezzenti akezzalii alles <u>fleohe</u> indi simblum <u>si</u> kehuctic alliu, dei kipoot cot,(\mathbb{V} 40)

この Ⅲ 40 に見られるような対応は、"ベネディクト修道会会則"の翻訳方法が 行間逐語訳(Interlinearversion)によっているために生じたと考えることも可能 であるが、次の同じ構文におけるラテン語 Konj.Präs. と古高ドイツ語 Ind.Präs. の対応から、これが、必ずしも、機械的な翻訳によるものでないことがわかる。

(35) Secundus humilitatis gradus est, si propriam quis non amans voluntatem desideria sua non delectetur implere,

「もし人が自分自身の願いを愛することなく、自分の欲求を満たすことを喜ば ないならば、(それが) へりくだりの第二の段階である。」

andar dera deomuati stiagilsprozzo ist, ibu eiganan huuelih niminnoot uuillon kirida sina nist kelustidoot erfullan, (\mathbb{V} 44)

また、ラテン語 Ind. Präs. と古高ドイツ語 Konj.Präs. の対応例 3 例中、2 例の帰結文には命令文が現れ (場合 1)、他の 1 例はそれ自身副文である帰結文に接続法が現れる(場合 2)

表5

	Ind.Prs.	Konj.Prs.	対応なし
Ind.Prs.	15 5	2 1	2
Ind.Perf.	1 0	0 0	0
Ind.Pluperf.	17 14	2 2	5
Konj.Prs.	7 0	14 3	1
対応なし	0	0	0

(横列は古高ドイツ語、縦列はラテン語を表す)

IV . イシドール (Isidor) — 表 6

- 1)Realis (ラテン語 (直説法) ………古高ドイツ語 (直説法))
- (36) Item si Christus dominus non <u>est</u> quis <u>est</u> ille dominus exercituum, qui a domino exercituum mittitur?

「同様に、もしキリストが主でないならば、万軍の主から遣わされたあの万軍 の主は誰であろうか?」

Ibu nu christ druhtin <u>nist</u> huuer <u>ist</u> dher uuerodheoda druhtin, dher fona uuerodheoda druhtine uuard chisendit?(215)

3)Potentialis

ラテン語 Potentialis3 例(Konj.Präs.3 例)中、2 例は古高ドイツ語 Ind. Präs. と、1 例は古高ド Konj.Präs. と対応するが、この後者の対応における古高ド Konj.

Präs. は、以下のように、除外文を導く接続詞 nibu とともに用いられたものである。

(37) eo quod filius non nisi ex duobus nascatur,

「というのは、2つのものから生まれたのでないならば、息子は存在しないからである。」

bidhiu huuanda sunu nist, nibu fona zuuem chiboran uuerdhe.(123)

また、ラテン語 Ind. Präs. と古高ドイツ語 Konj.Präs. の対応例 1 例の場合も同様である。

4)Irrealis

(古高ドイツ語 (接続法過去形):前提文1例のみ)

(38) Si christus deus non est, cui dicitur in psalmis: Ibu christus auur got ni <u>uuari</u>. dhemu in psalmom chiquhedan uuard:(136)

「もし(それはあり得ないことであるが)仮に、キリストが、詩篇で次のよう に語りかけられた、神でないならば|

(ラテン語 (接続法過去完了形) ………古高ドイツ語 (接続法過去形) (前提文のみ)

(39) Nisi dominus reliquisset nobis semen.

「もし主が我々に子孫を残さなかったならば。」

Nibu druhtin uns firleazssi samun.(573)

表6

	Ind.Präs.	Ind.Prät.	Konj.Präs.	Konj.Prät.	対応なし
Ind.Präs.	5	0	1	1	0
Ind.Perf.	0	1	0	0	0
Ind.Futperf.	1	0	0	0	0
Konj.Präs.	2	0	1	0	0
Konj.Pluperf.	0	0	0	1	0
対応なし	2	0	0	0	0

(横列は古高ドイツ語、縦列はラテン語を表す)

V. オトフリートの福音書 (Otfrids Evangelienbuch) — 表 7

- 1)Realis (古高ドイツ語 (直説法))
- (40) Oba iz zi thiu wirdit. thaz thaz salz firwirdit: wer findit untar manne, mit wiu man gisalze iz thanne?(II.17.7)

「もし塩が効かなくなることになれば、人々の誰がそれ(塩)に塩味をつける すべを見いだすであろうか?

3)Potentialis

missidati;(II.21.41)

古高ドイツ語 Konj.Präs.18 例 16 中、17 例はその帰結文に命令文が現れる (場合 1) が、以下の 1 例は場合 $1 \cdot 2$ に当てはまらず、場合 3 に該当すると考えられる。 (41) Ob ir in muatiu <u>lazet</u>, thaz sunta ir io bilazet 13: so dilont sino guati thio iuo

「もしあなたがたが(人々の)罪を許すことを自分の心に認める(心に決める) ならば、主の卓越した性質(慈しみ)はあなたがたのあやまちを消し去ること になる。」

この文は、新約聖書の(45)に対応する箇所であり、ラテン語 Ind.Futperf.と古

高ドイツ語 Konj. Präs. が対応していることがわかる。

(42) si enim dimiseritis hominibus peccata eorum, dimittet et vobis pater caelestis delicta vestra;(Mt.6.14)

「もしあなたがたが人々の罪を許すならば、天の父もあなたがたのあやまちを 許すであろう。」

4)Irrealis

(古高ドイツ語 (接続法過去形))

(43) Ob ih giwisso iz westi, ih scribi iz hiar in festi;(I.19.27)

「もし私がそれを確実に知っているならば、私はそれをここにしっかりと書き 記すであろうに。|

(古高ドイツ語 (接続法過去形))

(44) Ob er <u>sprachi</u> ubar al, so man zi gotes sune skal, <u>sprachi</u> thanne in thesa wis,(II.4.71)

「もし彼が、神の息子に対してふさわしい方法で語ったのならば、彼はその場合このように語ったであろうに!

表7

	Ind.Prs.	Ind.Prt.	Konj.Prs.	Konj.Prt.
用例数	42 0	6 0	17 14	27 6

4. ギリシア語条件文 ¹⁴ の動詞の法・時制とゴート語条件文の動詞の法・時制 の対応について—— 表 8

- 1)Realis (ギリシア語 (直説法) ………ゴート語 (直説法))
- (45) εἰ δὲ ὑμεῖς οὐκ ἀφίετε, οὐδὲ ὁ πατὴρ ὑμῶν ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς ἀφήσει τὰ παραπτώματα ὑμῶν

「もしあなたがたが許さないならば、天にいるあなたがたの父もあなたがたの あやまちを許さないであろう。」

iþ jabai jus ni <u>afletiþ</u>, ni þau atta izwar sa in himinam <u>afletiþ</u> izwis missadedins izwaros.(Mk.11.26)

2)Eventualis

ギリシア語 Eventualis133 例 (Konj.Präs.45 例, Konj.Perf.2 例, Konjj.Aor.86 例) 中、それぞれ 26 例,2 例,63 例がゴート語 Ind. Präs. と対応し、残り 42 例中 38 例はゴート語 Konj.Präs. (ギリシア語 Konj.Präs.18 例, Konj.Aor.20 例) に、3 例はゴート語 Konj.Prät. (ギリシア語 Konj.Präs.1 例, Konj.Aor.2 例) に対応する (対応なし1 例)。ギリシア語 Konj. とゴート語 Konj.Präs. の対応例 38 例中、25 例には以下のように帰結文に命令文が現れる (場合1)。

(46) καὶ ἐὰν σκανδαλίζη σε ἡ χείρ σου, ἀπόκοψον αὐτήν $\lceil \text{そしてもしあなた} \text{の} - \text{方} \text{の} \text{手があなた} \text{に罪を犯させるならば、それを切り捨 てなさい。} \rceil$

jah jabai marzjai þuk handus þeina, afmait þo(Mk.9.43)

しかし、ギリシア語 Konj. とゴート語 Konj. Präs. の残り 13 の対応例は、場合 1、2に当てはまらず、場合 3 に該当すると考えられる。その中 3 例は、以下のように、ギリシア語の帰結文に未来形が用いられており、これらの条件文が Eventualis ①に属することがわかる。ゴート語の最初の 2 例の帰結文にはそれぞれ接続法

現在形 galveilaiþ, sijau が、残り 1 例には直説法現在形 wairþiþ が用いられている 15 。

(47) καὶ ἐὰν ἦ ἐκεῖ εἰρήνης ἐπαναπαύσεται ἐπ αὐτὸν ἡ εἰρήνη ὑμῶν 「そしてもし平安の子がそこにいれば、あなたがたの(祈る)平安はその人の上に留まるであろう。」

jah jabai <u>sijai</u> jainar sunus galvwairþjis, <u>galveilaiþ</u> sik ana imma gawairþi izwar (Luk.10.6)

aþþan jabai wiljau hopan, ni sijau unwita,unte sunja qiþa,(II .Kor.12.6)

(49) ἐὰν οὖν τις ἐκκαθάρῃ ἑαυτὸν ἀπὸ τούτων, ἔσται σκεῦος εἰς τιμήν, ἡγιασμένον, καὶεὕχρηστον τῷ δεσπότῃ,

「もし人がそれらのものから自らを清めるならば、彼は聖別され、主人に役立つ、 栄光の器となるであろう。」

aþþan jabai has <u>gahrainjai</u> sik þizei, <u>wairþiþ</u> kas du sweriþai, gaweihaiþ, bruk fraujin, (II .Tim.2.21)

この用法は、上述の、主にラテン語未来完了形との対応を示す古高ドイツ語の 次の3例にも認められる。

(25) Oba her thanne uuahsamon tuoe:(Tat.102.2)

「もし(来年)実がなれば(結構です)|

- (29) ube dû sia uuola <u>bechennêst</u>. sô habo ih zît, tir dia uuârûn ze ougenne.(B.181.9) 「もしあなたがそのことをはっきりと認識したならば、次はあなたに真の幸福を示す時です。」
- (41) Ob ir in muat iu <u>lazet</u>, thaz sunta ir io bilazet: so dilont sino guati thio iuo missidati;(Ot. II .21.41)

「もしあなたがたが(人々の)罪を許すことを自分の心に認めるならば、主の 慈しみはあなたがたのあやまちを消し去ることになる」

Eventualis 条件文のもう一つの典型的な用法は反復的事実. 一般的真理を表す用法であり(Eventualis ②)、この用法を示す以下の Eventualis 条件文(1 例は認容文)に用いられているギリシア語 Konj.10 例にゴート語 Konj.Präs.10 例が対応している。ギリシア語の帰結文には、断定的な否定を表す "où $\mu \eta$ +接続法" (53) を除いてすべて直説法現在形が、ゴート語の帰結文には、(52),(54) に状態動詞 wisan の直説法現在形が、(50),(53) に接続法現在形が用いられている。また、後述のギリシア語 Realis との 2 例の対応においては、帰結文にそれぞれ接続法現在形 (55) と直説法現在形 (56) が用いられている。((51) には帰結文が欠けている。)

- (50) ἐὰν τις τὸν λόγον μου τηρήση, οὐ μὴ γεύσηται θανάτου εἰς τὸν αἰῶνα. 「私の言葉を守る者は、誰でも永遠に死を味わうことがないであろう。」 jabai has mein waurd fastai, ni kausjai dauþau aiwa dage.(Joh.8.52)
- (51) έὰν εἴπη ἄνθρωπος τῷ πατρὶ ἤ τῇ μητρί κορβᾶν ὅ ἐστιν δῶρον ὅ ἐὰν ἐξ

έμοῦ ώφεληθῆς.

「もし人が父または母に向かって、"私からあなたが役に立つものとして受け取るものはコルバーンつまり、供え物です"と言えば(それでよいとして、)」

jabai <u>qibai</u> manna attin seinamma aiþþau aiþein: kaurban, þatei ist maiþms, þislvah þatei us mis gabatnis;(Mk.7.11)

(52) καὶ ἐὰν ἔχω προφητείαν καὶ εἰδῶ τὰ μυστήρια πάντα καὶ πᾶσαν τὴν γνῶσιν καὶ ἐὰν <u>ἔχω</u> πᾶσαν τὴν πίστιν ὥστε ὄρη μεθιστάνειν ἀγάπην δὲ μὴ ἔχω οὐδέν εἰμι.

「たとえまた、私が予言する力を持ちあらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、また、山を移すほどのあらゆる信仰を持っていても、もし愛がなければ 私は無である。」

jah jabai $\underline{\text{habau}}$ praufetjans jah $\underline{\text{witjau}}$ allaize runos jah all kunþi jah $\underline{\text{habau}}$ alla galaubein, swaswe fairgunja miþsatjau, iþ friaþwa ni $\underline{\text{habau}}$.ni waihts $\underline{\text{im}}$ (I.Kor.13.2)

(53) καὶ ἐὰν ψωμίσω πάντα τὰ ὑπάρχοντά μου, καὶ ἐὰν <u>παραδῶ</u> τὸ σῶμά μου ἵνα καυθήσωμαι, ἀγάπην δὲ μὴ ἔχω, οὐδὲν ὡφελοῦμαι

「たとえまた、私が自分の全財産を人に施しても、また、自分の体を焼かれる ために渡しても、もし愛がなければ、それは私にとって何の役にも立たない。」

jah jabai $\underline{\text{fraatjau}}$ allos aihtins meinos, jah jabai $\underline{\text{atgibau}}$ leik mein ei $\underline{\text{ga-brannjaidau}}$, friaþwa ni $\underline{\text{habau}}$. ni waiht botos mis $\underline{\text{taujau}}(I.\text{Kor.}13.3)$

次の1例は条件文というよりは、むしろ、認容文として解釈され得る。

(54) καὶ ἐὰν ἀγαθοποιῆτε τοὺς ἀγαθοποιοῦντας ὑμᾶς ποία ὑμῖν χάρις ἐστίν; 「もしあなたがたが自分達に良いことをしてくれる人々によくしたとしても、 どのような感謝をあなたがたは受けるであろうか?」

jah jabai þiuþ $\underline{\text{taujaid}}$ þaim þiuþ taujandam izwis, ba izwis laune ist?(Luk.6.33)

また、ギリシア語 Ind. Präs. とゴート語 Konj. Präs. の対応 20 例 (B 写本 22 例) 中、次の 2 例もここに属している。

(55) εἰ καυχᾶσθαι δεῖ τὰ τῆς ἀσθενείας μου καυχήσομαι
「もし誇らねばならないのなら、私は自分の弱さを誇ろう」
jabai hopan skuld sijai baim siukeins meinaizos hopau(II.Kor.11.30)

(56) εἰ περιτομὴν ἔτι κηρύσσω τί ἔτι διώκομαι $\lceil \text{Αλύ} + \text{Constant} \rceil$ $\lceil \text{Aλύ} + \text{Constant} \rceil$ $\text{Aλύ} + \text{Constant} \rceil$ Aλύ + Constant $\text{Aλύ} + \text$

jabai bimait merjau, dube þanamais wrikada?(Gal.5.11)

ゴート語接続法現在形のこの用法は、古高ドイツ語の次の例文における接続法 現在形の用法にも、両言語ともそれぞれ Eventualis 及び Potentialis との対応と いう違いはあるが、認められる。

(33) keuuisso ibu uzzana chirihhun <u>piliben</u>......kestatot.....slaffit(Benedikt.XL Ⅲ 101) 「というのは、もし彼らが礼拝堂の外に留まっていることがあれば、横になって眠る(者もいるかもしれない)」

(34) eristo inunu dera deoheiti stiagilsprozzo ist, ibu forahtun cotes imu fora augom simblum sezzenti akezzalii alles <u>fleohe</u> indi simblum <u>si</u> kehuctic alliu, dei kipoot cot,(Benedikt. WI 40)

「もし(人が)神への恐れを常に念頭に置きながら忘却を完全に捨て去り、神 が命じた事を常に覚えているならば、(それが)へりくだりの最初の段階であ る。」

4)Irrealis

(ギリシア語 (直説法未完了過去形) ………ゴート語 (接続法過去形))

(57) εἰ ὁ θεὸς πατὴρ ὑμῶν ἦν ἡγαπᾶτε ἃν ἐμέ

「もし神があなたがたの父であるならば、あなたがたは私を愛するであろうに」 jabai guþ atta izwar wesi, friodedeiþ þau mik,(Joh.8.42)

(ギリシア語(直説法アオリスト形)………ゴート語(接続法過去形))

(58) εἰ ἐν Σοδόμοις <u>ἐγένοντο</u> αἰ δυνάμεις αὶ γενόμεναι ἐν σοί <u>ἔμειναν</u> ἄν μέχρι τῆς σήμερον

「もし汝の中でなされた力にあふれた業がソドムでなされたならば、その町は 今日までなお残っていたであろうに。」

jabai in Saudaumjam <u>waurþeina</u> mahteis þos <u>waurþanons</u> in izwis, aiþþau eis weseina und hina dag.(Mt.11.23)

表8

	Ind.Prs.	Ind.Prt.	Konj.Prs.	Konj.Prt.	対応なし
Ind.Prs.	55 0	0	20/22 0	0	1
Ind.Perf.	3/4 0	5/4 0	0	0	0
Ind.Imperf.	0	1 0	0	6 10	0
Ind.Pluperf.	0	0	0	0 1	0
Ind.Aor.	2 0	24 0	0	2 7	1
Konj.Prs.	26 0	0	16 0	1 0	0
Konj.Perf.	1 0	0	0	0	0
Konj.Aor.	61 0	0	15 0	2 0	1
対応なし	4	1	3	2	0

(横列はゴート語、縦列はギリシア語を表す)

5. 結論

印欧祖語の 1. 接続法と 2. 希求法は、その意味と用法に従って、それぞれ 1. ①意志の接続法 (Conjunctivus voluntativus)、②期待の接続法 (Conjunctivus eventualis; 2. ①願望の希求法 (Optativus desiderativus)、②可能の希求法 (Optativus potentialis) に区分されるが、ゲルマン語においてはこれらすべての用法が、起源的には印欧祖語の希求法に遡る接続法によって引き継がれた。しかし、従来、ゲルマン語の接続法が 1. 要求の接続法 .. (voluntativer Konjunktiv), 2. 可能の接続法 (potentialer Konjunktiv) に区分されることが常であったために、例えば、上述 1. ①意志の接続法の (59) のような対応にも見られるように、印欧祖語の接続法がゲルマン語の接続法にも引き継がれているにもかかわらず、ゲルマン語接続

法の上述の2区分の結果、本来は1.②期待の接続法と2.②可能の希求法の両方を引き継ぐ可能の接続法 (potentialer Konjunktiv) が、可能の希求法 (Optativus potentialis) と同一視され、接続法現在形による条件文は、Potentialis と呼ばれることが一般的であった ¹⁷。

(59) be wasjaima?(Mt.6.31)

「何を我々は着ようか?」

τί περιβαλώμεθα;

接続法現在形による条件文を Potentialis とのみ定義することは、しかしながら、古高ドイツ語 (25),(29),(41) 及びゴート語 (47),(48),(49) が、未来に起こり得ると想定される事柄を表す Eventualis に属することから、不十分であることがわかる。また、この形式による条件文が、古高ドイツ語 (34) 〒 40(2 例), 〒 45(3 例), 〒 48(2 例), 〒 49(3 例), 〒 50(2 例),(33) においてラテン語 Potentialis に、ゴート語 .(50) - (56) においてギリシア語 Eventualis ②に対応する。これらは、用例数が極めて僅かなために、その意味を確定することは困難であるが、1)Realis, 2) Eventualis ① ,4)Irrealis に属するものでないことは確かであり、また、ゲルマン語の接続法が印欧祖語の 1. ②期待の接続法 ,2. ②可能の希求法の両方を引き継ぐことから、これらは 2)Eventualis ② ,3)Potentialis の 2 つの意味を併せ持つと考えることも可能である。そこで、ゲルマン祖語、ゴート語及び古高ドイツ語の条件文の体系は以下のように図示することができる。

Germ.	Real.(Ind.)	Event. (Konj.Prs.)	Potent. (Konj.Prs.)	Irreal. ① (Konj.Prt.)	Irreal. ② (Konj.Prt.)
Got.	Real.(Ind.)	Event. (Konj.Prs.)	Potent. (Konj.Prs.)	Irreal. ① (Konj.Prt.)	Irreal. ② (Konj.Prt.)
Ahd.	Real.(Ind.)	Event. (Konj.Prs.)	Potent. (Konj.Prs.)	Irreal. ① (Konj.Prt.)	Irreal. ② (Konj.Prt.,Konj. Pluperf.)

このようにして、現代ドイツ語ではインド・ヨーロッパ祖語の接続法(Konjunktiv, Subjunktiv)に関して、1)期待の接続法(conjunctivus eventualis)、2)意志の接続法(conjunctivus voluntativus)、のうち、1)「事柄が場合によっては未来に起こり得る」という「偶発性」(Eventualität)の表現として、「万一~の場合、たとえ~であっても」を意味する「sollen の接続法 II 式 + 不定詞」の形式が用いられる:

Wenn/Falls es morgen regnen sollte, bleiben wir lieber zu Hause.

Auch wenn er mir eine Million Euro bieten sollte, ich würde das Haus nicht verkaufen.

また、2) 意志の接続法(conjunctivus voluntativus)はドイツ語における勧誘の接続法(Adhortativ)として、「勧誘・提案」を表すために用いられる:

Gehen wir durch den Park spazieren!

インド・ヨーロッパ祖語の希求法(Optativ)に関して、1)願望の希求法(optativus desiderativus)、2)可能性の希求法(optativus potentialis)、のうち、1)の話者の「願望・要求」を表すために、ドイツ語では接続法 I 式による要求話法および接続法 I 式による非現実話法が用いられる:

Es gebe doch keinen Krieg!

Hätte ich doch viel Geld!

また、2) は「想像・仮定」に基づく事柄を表し、ドイツ語における接続法 I式による間接話法の起源である:

Er sagte, er sei damals in München gewesen.

ドイツ語史においては次の例のように、可能の希求法に由来する「想像・仮定」の接続法第1式が非現実を表す接続法第2式に置き換えられるという現象が見られる。これにより、現代ドイツ語では「想像・仮定(potentialis)」と「非現実(irrealis)」は接続法第2式という同じ形で表現されるようになった:

Mhd. ir houbet ist sô wünnenrîch, als ez mîn himel welle sîn (Walter 53.35)

"Ihr Haupt ist so voller Wonne, als ob es mein Himmel sein wollte (wtl. wolle)."

doch ist ir deheine, weder grôz noch kleine, der versagen mir iemer wê getuo (Walther 53.22) "Aber unter ihnen allen gibt es keine einzige, deren "Nein" mir je Schmerz bereiten könnte."

従って、次のような文における接続法第2式は irrealis ではなく、potentialis の用法であると考えることが可能である ¹⁸:

Es ist denkbar, dass Sabine diesen Herbst wieder nach Deutschland zurückkehrt. Sie würde dann etwa sechs Jahre in den USA tätig gewesen sein.

- 1 Behaghel 1928: 669-670
- 2 Behaghel 1928: 677
- 3 Wilmanns 1906: 226-227
- 4 Furrer 1971: 69-72
- 5 古典ギリシア語では Irrealis ①に関して、前提文および帰結文に未完了過去形が 用いられるが、希求法が印欧祖語本来のものである。高津(1971:402)参照。
- 6 ラテン語では、祖語の①意志の接続法、②期待の接続法のうち、後者は直説法 未来形となったが、前者は例えば次の例文のような考慮・懸念の接続法(conjunctivus deliberativus, dubitativus)の用法によって引き継がれている: quid ego nunc faciam?(Plaut.Men.963)

「今、私は何をすればよいのだろう? |

- 7 この区分は厳密なものではなく、古代ラテン語期においても接続法過去完了形による Irrealis ②の例も、また、古典ラテン語期においても接続法現在形による Irrealis ①の例もともに存在する。Mugler (1980:128) 参照。
- 8 印欧祖語における Irrealis ②はサンスクリット語とギリシア語の対応が一致しないが、近年、祖語の形として両者の語形とは異なる希求法完了形がその候補として挙がっている。この問題に関して S.W.Jamison(Where Are All the Optatives: In "East and West (2009) p.39-40") は次のように述べている: In Kmmel 's vast work on the Indo-Iranian perfect, he devotes less than one page to the function of the perfect optative(2000:89-90). He finds evidence in a few passages for the value of "Irrealis/Potentialis der Vergangenheit", corresponding to the Younger Avestan usage. また、希求法完了形こそまさにドイツ語の接続法第2式の起源でもある:*ψeψrtī>würde.非現実性については Laftman (1931:284-287) 参照。
- 9 Kühner (1988:395-400) に従えば、古代ラテン語では、3) ①現在における可能な事柄、②過去における可能な事柄のうち、①は接続法現在形(完了形)、②は次の例文のように接続法未完了過去形によって、4) ①現在の非現実な事柄、②過去の非現実な事柄のうち、①は接続法現在形、②は接続法未完了過去形によってという具合に、3) Potentialis、4) Irrealis が同じ形式によって表されていたが、古典ラテン語の時代になって両者の分化が行われたとされている。因みに、Konj.Präs. と Konj.Prät. は未完了的・完了的というアスペクトの対立を表している:

si invitare nos paulisper pergeret, ibidem obdormissemus:(Plaut.Rud.590) 「もし、彼が我々をもてなし続けることがあったならば、我々はその場ですぐに眠り込んだであろうに |

- 10 表2以下のラテン語と古高ドイツ語、およびギリシア語とゴート語の対応用例数は筆者著『古高ドイツ語の条件文における接続法現在形の意味と用法について(東京大学言語学論集(1995)14、p.296-p.311)』に基づく。
- 11 Notker 『哲学の慰め』 において初めて、ラテン語との対応は存在しないが、現 代ドイツ語と同様に接続法過去完了形による Irrealis ②の用例が 1 例 (B.376.14) 登場する。

- 12『哲学の慰め』と同じ訳者による翻訳作品であるため、例文は省略する。
- 13 Kelle の Glossar では、この箇所は "Ob ir in muat lâzet, thaz sunta ir io biâzet" のように直説法と解釈されているが、Erdman(1973:170) も述べているように、thaz 以下の目的文には、当然、接続法 bilâzêt が用いられ、またこの動詞と韻を踏む条件文中の動詞も lâzêt でなければならない。そこで、この箇所は Piper 版の "Ob ir in muat lâzêt, thaz sunta ir io biâzêt" が正しいと考えられる。
- 14 新約聖書ギリシア語においては、3) Potentialis 条件文の用例は存在しない。
- 15 ゴート語の wairþan は、接頭辞 ga- を付加することなしに、それ自体が完了的なアスペクトを持ち、従って現在形が未来の事柄を表す。また、wisan の接続法現在形 sijai は Streitberg も指摘しているように、継続的未来(das durative Futurum)の役割を果たしている。Streitberg (1981:45)参照。
- 16 帰結文における接続法現在形のうち、(50) kausjai、(53) taujau は未完了のアスペクトを持ち、未来の一回的な動作・状態ではなく、反復的な動作・状態および一般的真理を表している。
- 17 例えば、Streitberg(1981:91) では、(53)、(55) がともに "Die potentiale Bedingung" と定義されている。
- 18 O.Leirbukt: Untersuchung zur temporalen Umfunktionierung des Konjunktivs II im heutigen Deutsch, p.24.

この例文が示すように、これから起こる可能性があるという点に着目すれば Potentialis であり、まだ起こっていないという点に着目すれば Irrealis である。 従来、ドイツ語教育においては後者の解釈に重点が置かれていた。しかし、 "Wenn ich ein Vogel wäre, könnte ich zu dir fliegen."のような Irrealis のみを表す接続法と、上述の "Sie würde dann etwa sechs Jahre in den USA tätig gewesen sein."の 意味的な差は歴然としており、その点からも Irrealis と Potentialis の区別は有益であると考えられる。また、E.Smirnova(2006:p.11f.) も würde + 不定詞の多義性について詳しく論じている。

尚、現代英語においては、古風な文体とはいえ、仮定法現在形による、2) Eventualis ①: "If he do so, he will do wrong."、3) Potentialis: "If this be so, we are all at fault. "が今日に至るまで存続していることは注目に値する。

テクスト

Tatian, hrsg. v. E.Sievers, Ferdinand Schöningh Paderborn 1960

Notker des Deutschen hrsg. v. E.H.Sehrt / T.Starck

- 1. Boethius, De consolatione Philosophiae, Max Niemeyer Halle 1966
- 2. Martianus Capella, De nuptiis Philologiae et Mercurii, Halle 1966

Die Althochdeutsche Benediktinerregel des Cod.Sang 916, hrsg .v .U.Daab, Max Niemeyer Tübingen 1959

Der althochdeutsche lsidor, hrsg. v. H.Eggers, Max Niemeyer Tübingen 1964

Otfrids Evangelienbuch, hrsg, v. O.Erdmann, Max Niemeyer Halle 1882

Die Gotische Bibel, hrsg. v. W.Streitberg, Carl Winter Heidelberg 1971

略語一覧

言語名 ..

Germ.:Germanisch Lat.: Lateinisch
Got.: Gotisch Ahd.: Althochdeutsch

Gr.: Griechisch Skt.: Sanskrit

IE.: Indo-Europäisch

作品名及び人名

B.: Boethius, De consolatione Philosophiae

Benedikt.: Benediktinerregel

Cas.: Casina
Gal.: Galater
Hom.: Homerus
Joh.: Johannes
Kor.: Korinther
Luk.: Lukas

Men.: Menaechmi

Mk.: Markus

Mt.: Matthaeus

Ot .: Otfrids Evangelienbuch

Plaut.: Plautus Rud.: Rudens Rv.: R g-Veda

ŚB.: Śatapatha Brāhmaṇa

Tat.: Tatian

Tim.: Timotheus

術語...

Aor.: Aorist Ind.: Indikativ Präs.: Präsens
Kond.: Konditional Irreal.: Irrealis Prät.: Präteritum
Event.: Eventualis Opt.: Optativ Real.: Realis
Fut.: Futurum Perf.: Perfekt Konj: Konjunktiv
Futperf.: Futurum Perfectum Pluperf.: Plusquamperfekt

Imperf.: Imperfekt Potent.: Potentialis

参考文献

Behaghel, Otto. 1928: Deutsche Syntax Bd.3. Heidelberg Carl Winter.

Delbrück, Berthold. 1904: Der germanische Optativ im Satzgefüge. In: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur 29 pp.201-304.

Erdmann, Oskar. 1973: Untersuchung über die Syntax der Sprache Otfrids. Halle 1874; Nachdr. Hildesheim:Georg Olms

Furrer, Dieter. 1971: Modusprobleme bei Notker. Berlin: de Gruyter.

Kelle, Johann. 1963: Otfrids von Weissenburg Evangelienbuch Bd.3 Glossar, Neudruck der Ausgabe 1881. Aalen: Otto Zeller.

高津春繁.. 1971:『ギリシア語文法』東京:岩波書店

Kühner, Raphael / Stegmann, Carl. 1988: Ausführliche Grammatik der lateinischen Sprache Bd.2. Hannover: Verlag Hahnsche Buchhandlung

Kümmel, Martin 2000: Das Perfekt im Indoiranischen, Wiesbaden. Reichelt Verlag 2000 Laftman, Emil. 1931: Zur Frage des Modus in deutschen Bedingungsnebensätzen". In: Zeit-

- schrift für deutsche Philologie 56. pp.284-309.
- Leirbukt, Oddleif 2008: Untersuchung zur temporalen Umfunktionierung des Konjunktivs II im heutigen Deutsch. Tübingen. Niemeyer
- Mugler, France. 1980: "Concerning the Usage of the Conditional Sentence in Latin". In: Glotta 58 pp.119-132.
- Piper, Paul. 1982: Otfrids Evangelienbuch. Nachdr. der Ausgabe 1882. Hildesheim: Georg Olms
- 斎藤治之 1995: 『古高ドイツ語の条件文における接続法現在形の意味と用法について』(東京大学言語学論集 (1995) 14、p.287 p.317)
- Smirnova, Elena 2006: Die Entwicklung der Konstruktion würde + Infinitiv im Deutschen. Berlin/ New York. de Gruyter.
- Streitberg, Wilhelm. 1981: Gotische. Syntax. Heidelberg:Carl Winter.
- Wilmanns, Wilhelm. 1967: Deutsche Grammatik. Straßburg 1906; Nachdr. Berlin: de Gruyter 1967